

セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析

安部 朋世

千葉大学・教育学部

A Semantic Analysis of “*seizei*,” “*takadaka*” and “*takaga*”

Tomoyo ABE

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、とりたて機能を有するとされる表現形式のうち、「セイゼイ」「タカダカ」「タカガ」を取り上げ、それぞれが現れる文の特徴を考察し、とりたて機能の観点からそれらの意味の違いを明らかにするものである。セイゼイとタカダカは、前者が当該要素を「限度」と位置付け、後者が「マイナス」に評価付けるという違いがあるものの、いずれも要素がスケール上に並ぶような前提集合が想定され、とりたて機能を有するといえるが、タカガは単にタカガによって示される要素自体をマイナスに評価付けるもので、他の要素や前提集合が想定されないことから、とりたて機能を有するものとするには問題があることが指摘できる。

キーワード：「セイゼイ」(*seizei*) 「タカダカ」(*takadaka*) 「タカガ」(*takaga*) スケール (*scale*)

1. はじめに

本稿は、「とりたて」機能を有するとされる表現形式のうち、「セイゼイ」「タカダカ」「タカガ」を取り上げ、それらの意味の違いをとりたて機能の観点から考察することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。2.節において、セイゼイ・タカダカ・タカガについての先行研究を検討し、その問題点を指摘した上で、3.節でセイゼイとタカダカを、4.節でタカダカとタカガを取り上げ、それぞれを置き換えた例文の許容度の違いから、セイゼイ文・タカダカ文・タカガ文の特徴を明らかにする。それらの考察を踏まえ、5.節でそれぞれがどのようなとりたて機能を有するかを明らかにする。

2. 先行研究の問題点

セイゼイ・タカダカ・タカガは、次のように、置き換えてもさほど意味が変わらない場合がみられる。

- (1) a 常務といっても、社員数タカダカ二十数人の会社だから、大企業のレベルでいえば部長就任といった程度のもなのだろうが、若手社員たちは野々宮がやってきたことによって会社の経営にどのような変化が起きるのか、といった話題でしばらくもちきりだった。(椎名誠)*1
- b 常務といっても、社員数セイゼイ二十数人の会社だから、大企業のレベルでいえば部長就任といった程度のもなのだろうが、若手社員たちは野々宮がやってきたことによって会社の経営にどのような変化が起きるのか、といった話題でしばらくもちきりだった。
- c 常務といっても、社員数タカガ二十数人の会社だ

から、大企業のレベルでいえば部長就任といった程度のもなのだろうが、若手社員たちは野々宮がやってきたことによって会社の経営にどのような変化が起きるのか、といった話題でしばらくもちきりだった。

一方、次のように、置き換えると許容度が下がる例も存在する。

- (2) a いまは、この小さな石油コンロが、もっともたよりになる二人の財産であった。水は作ってもすぐ凍ってしまうから、食事のたびに、石油コンロを使わねばならなかった。その石油の量も、あと二回か、セイゼイ三回分の水を作るだけの量しかなかった。(新田次郎)
- b??…その石油の量も、あと二回か、タカダカ三回分の水を作るだけの量しかなかった。
- c??…その石油の量も、あと二回か、タカガ三回分の水を作るだけの量しかなかった。
- (3) a せっかくここまで出世したものを、タカダカ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。(司馬遼太郎)
- b せっかくここまで出世したものを、タカガ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。
- c?? せっかくここまで出世したものを、セイゼイ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。
- (4) a 友人に非常な焼き物好きがいたお蔭で、古い陶磁器を見る機会は、学生の頃から多く、見るのは嫌いではなかった。しかし、相手はタカガ器物とはいえず、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思ひ知ったのは、余程後からのことであった。(小林秀雄)
- b? …しかし、相手はタカダカ器物とはいえず、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思ひ知ったのは、余程後からのことであった。
- c??…しかし、相手はセイゼイ器物とはいえず、嫌い

連絡先著者：

ではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると
思い知ったのは、余程後からのことであつた。

上記のように、置換可能な例がある一方、許容度の差が生ずる例がみられることから、セイゼイ・タカダカ・タカガには、意味的に類似する部分をもちながらも、それぞれの表す意味に違いがあることが予想される。しかし、先行研究では、管見の限りそれらの違いについて十分な説明が行われていないように思われる。

例えば、森田(1989)では、まず、セイゼイについて、(5)のように「ある限界内での努力を尽くす」という用法と、(6)のように「どんなに努力してみてもその限度を超えない」「ある限界点があつて、それ以上を希望し期待しても無理だとあきらめる意識から、最高に見積もってもその限界値、悪くすればそれ以下という行為の結果を見越した発想」の2つの用法を指摘する*2。

- (5) a 遊べるときに、セイゼイ遊んでおこう。
b セイゼイ頑張りましたえ。
c お得意様ですから、セイゼイ勉強しておきます。
(6) a いくら頑張っても一日セイゼイ二十ページしか訳せない。
b どんなに勉強してもセイゼイ七十五点ぐらいだろう。
c いくら抵抗してみたところで、現状維持がセイゼイだ。(以上森田1989)

そして、セイゼイとタカダカについて、「どんなに多く見積もっても」という意識でセイゼイと共通するが、前者が「その事物に対し、こちらが努力を十分に傾けてみてその限界値を示す発想で、より上のレベルや値を強く望みながらも意にまかせず、その限界で止まるようすを表す」のに対し、後者は「特に当人の努力を尽くすという前提はない」とし、(7)の例を挙げて、タカダカには「対象を傍観し、「軽視する気持ち」が含まれる」と述べる。

- (7) a 入場者はタカダカ百人だ。
b どんなに高く見積もってもタカダカ三百円の代物。
(a bとも森田1989)

しかし、(7)は、次のようにセイゼイに置き換えてもさほど意味の違いを感じられない。つまり、(7)に「対象を傍観する」視点が有り、(8)に「当人の努力を尽くすという前提」があるという説明では、両者の違いを説明できないのである。

- (8) a 入場者はセイゼイ百人だ。
b どんなに高く見積もってもセイゼイ三百円の代物。

また、工藤(1977, 2000)においては、セイゼイ・タカダカ・タカガについての言及があるものの、副詞の下位分類として「とりたて副詞」*3を立てることを提案し、とりたて副詞に分類される副詞類全般を考察することを目的とするために、個々の表現形式について必ずしも詳しい説明がなされているとはいえない、という問題点がある。例えば、工藤(1977)では、セイゼイとタカダカを「最大限の見積り」、タカガを「マイナスの価値評価」を表すとしていくつかの示唆的な指摘がなされているが、工藤(2000)では、セイゼイを「見積り方」、タカダカとタカガを「評価」というように、工藤(1977)とは異なる分類をし、なぜタカダカが「見積り」ではなく「評価」

を表すのかに対する説明がなされていない。

セイゼイ・タカダカ・タカガがとりたて機能を有するならば、それぞれがどのようなとりたて機能を有するのかを明らかにすることが、とりたて表現の研究にとって重要であると考えられる。個々のとりたて表現を分析することにより、それぞれの違いが明らかになり、とりたて全体の体系化に繋がると考えられるからである。よって、以下、セイゼイ・タカダカ・タカガにどのような違いがあるのかを考察することによって、それぞれのとりたて機能が如何なるものかを明らかにしていく。

3. セイゼイとタカダカの違い

2.節では、セイゼイとタカダカの置き換えによって許容度に差が生ずる例を挙げた。(9)がタカダカの許容度が下がる例の再掲であり、(10)がセイゼイの許容度が下がる例の再掲である。

- (9) a いまは、この小さな石油コンロが、もっともたよりになる二人の財産であつた。水は作ってもすぐ凍ってしまうから、食事のたびに、石油コンロを使わねばならなかつた。その石油の量も、あと二回か、セイゼイ三回分の水を作るだけの量しかなかつた。
(新田次郎)

b??…その石油の量も、あと二回か、タカダカ三回分の水を作るだけの量しかなかつた。

- (10) a せっかくここまで出世したものを、タカダカ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。

(司馬遼太郎)

b?? せっかくここまで出世したものを、セイゼイ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。

この両者を比較すると、次のような違いに気付く。すなわち、セイゼイに比べタカダカの許容度が下がる(9)は、セイゼイやタカダカに係る「三回分」という量が、「たいした量ではない」というニュアンスだけでなく、「二回か、最高でも“三回分”水を作れる量である」というように、「三回分が〈限度〉である」という解釈がなされるのに対し、セイゼイの許容度が下がる(10)では、セイゼイやタカダカに係る「乞食芸人」に「限度」であるといったニュアンスは感じられず、「たいしたものではない」というニュアンスのみ感じられるのである。

同様に、タカダカの許容度が下がる次の(11)(12)では、(11)ならば、「彼が行うこと」が「どんなに頑張っても“ステッキをかまえて獲物を撃つ気分だけを味わう”程度である」、(12)ならば、「少年の年令」が「多くても“十九”歳である」というように、いずれも「限度」という解釈がなされる。(11)では「～にとどめている」、(12)では「上だとしても」や「～を超えてはいまい」という表現を伴うことから、これらの文が「限度」を問題とする文だということがいえよう。これに対し、セイゼイの許容度が下がる(13)(14)では、「限度」というニュアンスは感じられず、「田舎貴族」や「尾張半国領主」を「たいしたものではない」とするニュアンスのみが感じられる。

- (11) a 実は彼は歐洲に連れられて一度だけ狩猟に行つてみたことがある。それが並々ならず難行軍の猟であつたため、彼は一度で懲々し、セイゼイステッキ

をかまえて獲物を撃つ気分だけを味わうにとどめて
いるのであった。(北杜夫)

b??…それが並々ならず難行軍の猟であったため、
彼は一度で懲々し、タカダカステッキをかまえて獲
物を撃つ気分だけを味わうにとどめているのであ
った。

(12) a 少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとして
もセイゼイ十九を超えてはいまいと思えました。
(谷崎潤一郎)

b??少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとし
てもタカダカ十九を超えてはいまいと思えました。

(13) a 土岐頼芸も、貴族である。しかしタカダカ田舎貴
族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点で、
京の本格的な貴族とは種類を異にしている。
(司馬遼太郎)

b??土岐頼芸も、貴族である。しかしセイゼイ田舎
貴族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点
で、京の本格的な貴族とは種類を異にしている。

(14) a 遠い京の、それもいまは有名無実のいわば権威の
亡霊になりはてている京都朝廷に、タカダカ尾張半
国の領主のくせに金を送るなどというのは、どうい
う実際の利益があるのであろう。(司馬遼太郎)

b??遠い京の、それもいまは有名無実のいわば権威
の亡霊になりはてている京都朝廷に、セイゼイ尾張
半国の領主のくせに金を送るなどというのは、どう
いう実際の利益があるのであろう。

セイゼイとタカダカの許容度の違いが「〈限度〉を問
題とするか否か」に関係することは、次の例からも支持
される。「最高で何位を取れるか」という「限度」を問
題とする文の場合には、セイゼイの許容度が上がりタカ
ダカの許容度が下がるのに対し、「銅メダル」自体の価
値を問題とする場合には、タカダカの許容度が上がりセ
イゼイの許容度が下がるのが観察される。

(15) A：彼は絶好調だね。この調子でいくと本番は何位を
取れるかなあ。

B：a セイゼイ入賞だよ。

b??タカダカ入賞だよ。

(16) A：銅メダルなんてすごいね。

B：a いや、タカダカ銅メダルです。

b? いや、セイゼイ銅メダルです。

一方、次の(17)(18)は、それぞれタカダカやセイゼイに置
き換えても許容度にかわりがない。

(17) a さっき、講演といったが、きょうの会は講演とい
うほど大げさのものではない。集まる者だって、セ
イゼイ二十名ぐらいだろう。(新田次郎)

b さっき、講演といったが、きょうの会は講演とい
うほど大げさのものではない。集まる者だって、タ
カダカ二十名ぐらいだろう。

(18) a 常務といっても、社員数タカダカ二十数人の会社
だから、大企業のレベルでいえば部長就任といった
程度のものなのだろうが、若手社員たちは野々宮が
やってきたことによって会社の経営にどのような変
化が起きるのか、といった話題でしばらくもちきり
だった。(椎名誠)

b 常務といっても、社員数セイゼイ二十数人の会社

だから、大企業のレベルでいえば部長就任といった
程度のものなのだろうが、若手社員たちは野々宮が
やってきたことによって会社の経営にどのような変
化が起きるのか、といった話題でしばらくもちきり
だった。

これは、(17)(18)が、「最高に見積もっても当該要素の数
値が〈限度〉である」という解釈も、「当該要素の数値
は〈たいした数ではない〉」という解釈も可能であるた
めだと考えられる。

以上のことから、セイゼイとタカダカについて、次の
ことが指摘できる。

(19) 「限度」を問題とし、「価値性」の解釈がされにくい
文の場合、セイゼイの許容度が上がり、タカダカの許
容度が下がるのに対し、「限度」が問題とされず、単
に「価値性」のみが問われる文の場合には、セイゼイ
の許容度が下がり、タカダカの許容度の方が上がる。

4. タカダカとタカガの違い

次に、タカダカとタカガについてみていく。

タカダカとタカガは、セイゼイとそれらとの違いに比
べると、一見、違いの差が小さいように思われる。先に
挙げたセイゼイとタカダカの用例をタカガについてみて
みると、次のようにタカダカと同様の振る舞いをみせる。

(20) a いまは、この小さな石油コンロが、もっともたよ
りになる二人の財産であった。水は作ってもすぐ
凍ってしまうから、食事のたびに、石油コンロを使
わねばならなかった。その石油の量も、あと二回か、
セイゼイ三回分の水を作るだけの量しかなかった。
(新田次郎)

b??…その石油の量も、あと二回か、タカダカ三回
分の水を作るだけの量しかなかった。

c??…その石油の量も、あと二回か、タカガ三回分
の水を作るだけの量しかなかった。

(21) a せっかくここまで出世したものを、タカダカ乞食
芸人のために命を落すこともあるまい。
(司馬遼太郎)

b せっかくここまで出世したものを、タカガ乞食芸
人のために命を落すこともあるまい。

c??せっかくここまで出世したものを、セイゼイ乞
食芸人のために命を落すこともあるまい。

(22) a 実は彼は歐洲に連れられて一度だけ狩猟に行っ
てみたことがある。それが並々ならず難行軍の猟で
あったため、彼は一度で懲々し、セイゼイステッキ
をかまえて獲物を撃つ気分だけを味わうにとどめて
いるのであった。(北杜夫)

b??…それが並々ならず難行軍の猟であったため、
彼は一度で懲々し、タカダカステッキをかまえて獲
物を撃つ気分だけを味わうにとどめているのであ
った。

c??…それが並々ならず難行軍の猟であったため、
彼は一度で懲々し、タカガステッキをかまえて獲物
を撃つ気分だけを味わうにとどめているのであった。

(23) a 少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとして
もセイゼイ十九を超えてはいまいと思えました。

(谷崎潤一郎)

b?? 少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとしてもタカダカ十九を超えてはいまいと思えました。

c?? 少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとしてもタカガ十九を超えてはいまいと思えました。

- (24) a 土岐頼芸も、貴族である。しかしタカダカ田舎貴族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点で、京の本格的な貴族とは種類を異にしている。

(司馬遼太郎)

b?? 土岐頼芸も、貴族である。しかしセイゼイ田舎貴族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点で、京の本格的な貴族とは種類を異にしている。

c 土岐頼芸も、貴族である。しかしタカガ田舎貴族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点で、京の本格的な貴族とは種類を異にしている。

- (25) a 遠い京の、それもいまは有名無実のいわば権威の亡霊になりはてている京都朝廷に、タカダカ尾張半国の領主のくせに金を送るなどというのは、どういふ実際の利益があるのであろう。(司馬遼太郎)

b?? 遠い京の、それもいまは有名無実のいわば権威の亡霊になりはてている京都朝廷に、セイゼイ尾張半国の領主のくせに金を送るなどというのは、どういふ実際の利益があるのであろう。

c 遠い京の、それもいまは有名無実のいわば権威の亡霊になりはてている京都朝廷に、タカガ尾張半国の領主のくせに金を送るなどというのは、どういふ実際の利益があるのであろう。

しかし、次の例は、タカガに比べるとタカダカの方が相対的に許容度が下がるように感じられる。

- (26) a 友人に非常な焼き物好きがいたお蔭で、古い陶磁器を見る機会は、学生の頃から多く、見るのは嫌いではなかった。しかし、相手はタカガ器物とはいえ、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思ひ知ったのは、余程後からのことであつた。

(小林秀雄)

b? …しかし、相手はタカダカ器物とはいえ、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思ひ知ったのは、余程後からのことであつた。

- (27) a 寿司屋では茶柱が二本も立ったので、眼をつぶってその辻占をぐっと呑みこんでしまった。だから、お前はいやしいと云うのだ。ほんの少しの事にでもキタイを持ちたがる。タカガ広告取りの女に、誰が何をしてくれると云うのだねと、神様みたいなものがささやきかける。(林美美子)

b? …だから、お前はいやしいと云うのだ。ほんの少しの事にでもキタイを持ちたがる。タカダカ広告取りの女に、誰が何をしてくれると云うのだねと、神様みたいなものがささやきかける。

- (28) a 何もまともなものは書けもしないくせに、文字が頭の芯にいつも明滅していると云う事はおかしい事なのだ。タカガ田舎者のくせに、いったい文学とは何事なのでございましょうか? 神様よ。

(林美美子)

b? 何もまともなものは書けもしないくせに、文字が頭の芯にいつも明滅していると云う事はおかしい

事なのだ。タカガ田舎者のくせに、いったい文学とは何事なのでございましょうか? 神様よ。

これらの文は、いずれも、タカガやタカダカが係っている部分である「器物」「広告取りの女」「田舎者」自体を単に「たいしたものではない」と評価しており、(26)ならば「絵」と比較して「器物」が」というような「他との比較において相対的に評価している文」ではない、という特徴が挙げられる。タカガについての工藤(1977)の「マイナスの価値評価そのものを表わす」という指摘は本稿の指摘と共通するが、タカダカとの比較から、さらに、「相対的な評価ではない」という点が指摘できるのである。

タカガとタカダカの違いに「相対的な評価か否か」が関係していることは、次の例からも支持される。例えば喧嘩をしているような場合に、相手を非難する表現として、(29) a のタカガは自然であるが、b のタカダカは想定的に許容度が下がるように感じられる。

- (29) a タカガお前に何ができる!

b? タカダカお前に何ができる!

(29) のような状況では、喧嘩相手を他と比較するというのではなく、相手そのものを直接的に非難する発言になりがちであると思われるが、そのような場合にタカガが用いられやすいことは、タカガが、「他との比較」といった相対的な観点からではなく、単にそれ自体をマイナスに評価付けるものであることを示しているといえよう。同様の例として次の例が挙げられる。

- (30) a 「全く、女性の力を今度の一件で、つくづく思い知らされましたよ」柳は肯いて、「タカガ女だとたかをくくっていたら、今じゃすっかり女社長は板に付いてしまった」(赤川次郎)

b? 「全く、女性の力を今度の一件で、つくづく思い知らされましたよ」柳は肯いて、「タカダカ女だとたかをくくっていたら、今じゃすっかり女社長は板に付いてしまった」

(30) のタカガの用例も、タカダカに置き換えると相対的に許容度が下がるように感じられるが、この例文も、「女と男」を比較しているというよりは、「女」自身を「たいしたことはできない」とマイナスに評価している例だからだと考えられる。

次の例文はタカガの用例であるが、タカダカに置き換えても不自然に感じられない。

- (31) a 一人九百貫の石なんて、人間でさえ出来るもんじゃありません。ところがあまがえるの目方が何匁あるかと云ったら、タカガ八匁か九匁でしょう。それが一日に一人で九百貫の石を運ぶなどはもうみんな考えただけでめまいを起してクウ、クウと鳴ってばたりばたり倒れてしまったことは全く無理もありません。(宮沢賢治)

b …ところがあまがえるの目方が何匁あるかと云ったら、タカダカ八匁か九匁でしょう。

これは、タカダカによって示される「八匁か九匁」が数量であることから、「数量のもつ〈スケール〉が想定され、他の数量との相対的な比較から〈たいした目方ではない〉というニュアンスが生ずる」という解釈が可能であること、また、「人間でさえ出来るもんじゃありま

せん」という文脈から、「人間」と「あまがえる」とが比較される」という解釈も可能であることから、タカダカに置き換えても許容度が下がらないのだと考えられる。つまり、タカダカとタカガが類似した意味に解釈されるのは、「〈たいしたものではない〉という〈マイナス評価〉が、他との〈相対的な関係〉から生ずる、という解釈が可能である」ということになる。

以上、タカガとタカダカの違いをまとめると次のようになる。

(32) 「相対的な評価」という解釈ができず、単にそれ自体をマイナスに評価する文の場合には、タカガに比べてタカダカの許容度が下がる。^{*4}

5. とりたて機能からみたセイゼイ・タカダカ・タカガ

3.節及び4.節における考察では、セイゼイとタカダカの違いは「〈限度〉を問題とするか否か」が、タカダカとタカガの違いは「相対的な評価か否か」が関係していることを指摘した。セイゼイ・タカダカ・タカガは、いずれも「とりたて機能」を有する「とりたて副詞」に分類される。本節では、それぞれがどのようなとりたて機能を有するのか、これまでに指摘した特徴をもとに考察していく。

安部(2005)ではセイゼイの用法について考察するが、その中で、「タカダカと類似する意味を有する」とする「用法②」、すなわち、本稿で問題とするセイゼイを「とりたて用法」と位置付け、次のようにまとめている。

(33) スケール上に位置付けられる形で想定される前提集合の中で、最も高レベルではない(スケール上、当該要素より高レベルの要素が想定される)要素を「限度」と位置付ける、発話者の主観的判断を表す。

(安部2005(65))

「とりたて」とは、概ね、「〈文中においてとりたてられるある要素〉と〈それと対比的な関係にある要素〉との〈範列的な関係〉を示すもの」とまとめられる。とりたてられる要素を「当該要素」、対比的な関係にある要素を「他の要素」、当該要素と他の要素から成る集合を「前提集合」とすると、セイゼイは、当該要素よりも高レベルの他の要素が想定されるようなスケール上に並べられる前提集合の中で、当該要素を「限度」と位置付けるものということになる。

これに対し、タカダカは、「限度」を問題とするのではなく、「相対的な評価性」を問題とする文であり、タカダカが許容される文は、タカダカによって示される要素が他の要素と対比的な関係にあると解釈できる例文であった。

例えば、次の「乞食芸人」を「たいしたものではない」と評価付ける文では、「ここまで出世したものを」という文脈があることから、「自分」と「乞食芸人」を比較し、「相対的に「乞食芸人」を〈たいしたものではない〉と位置付けている」と解釈することが可能である。

(34) せっかくここまで出世したものを、タカダカ乞食芸人のために命を落すこともあるまい。(司馬遼太郎)
次の例も、「田舎貴族」に対してマイナスの評価付け

を行う文であるが、「土岐頼芸も、貴族である」という文脈があることから、「田舎貴族」を〈貴族全般〉という集合の中で比較して、相対的に〈たいしたものではない〉と評価している」という解釈が可能である。

(35) 土岐頼芸も、貴族である。しかしタカダカ田舎貴族で、そのうえ、富力と武力という背景がある点で、京の本格的な貴族とは種類を異にしている。

(司馬遼太郎)

これに対し、次の例文は、「器物」それ自体を「たいしたものではない」と評価付ける文であって、「器物」を他のものとの比較において評価付けているという解釈が許容されないため、タカダカが不自然になるのだと考えられる。

(36)? 友人に非常な焼き物好きがいたお蔭で、古い陶磁器を見る機会は、学生の頃から多く、見るのは嫌いではなかった。しかし、相手はタカダカ器物とはいえず、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思いついたのは、余程後からのことであった。

また、このマイナスの評価付けは、一般常識による評価付けではなく、発話者の主観的な判断である。(37)において、一般常識からすると最も高レベルのプラス評価が下されるはずの「金メダル」にタカダカに係る例文が許容されるのは、発話者がさらに上のレベルを想定し、「相対的に“金メダル”を〈たいしたものではない〉と〈低レベル〉に位置付けている」と解釈されるからだと考えられる。

(37)A: 金メダルなんてすごいですね。

B: いや、タカダカ金メダル、まだまだ上を目指します。

以上のように、タカダカは、他との相対的な比較において評価付けがなされる点で、とりたて機能を有することができる。とりたて機能の面から捉え直すと、タカダカは次のようにまとめられる。

(38) タカダカ: スケール上に位置付けられる形で想定される前提集合の中で、当該要素を「低レベル」と位置付ける、発話者の主観的判断を表す。

セイゼイとタカダカは、「限度」と位置付けるか「たいしたものではない」と「低レベル」に位置付けるかの違いはあるにせよ、いずれも〈当該要素と対比される他の要素が想定され、それらがスケール上に並ぶような前提集合が想定される〉という点で、ともにとりたて機能を有することができる。

これに対し、タカガは「相対的な評価性」が問題とされず、単にそれ自体をマイナスに評価付けるものであった。(39)ならば、「器物」を他の事物と比較するのではなく、単にそれ自体を「たいしたものではない」と評価付けていると解釈される。

(39) 友人に非常な焼き物好きがいたお蔭で、古い陶磁器を見る機会は、学生の頃から多く、見るのは嫌いではなかった。しかし、相手はタカガ器物とはいえず、嫌いではないと好きとの間は、天地雲泥の相違があると思いついたのは、余程後からのことであった。

(小林秀雄)

つまり、タカガによって示される要素自体の評価付けは行われるが、それと対比される他の要素の想定が行わ

れないのである。

とりたて機能は、当該要素と対比される他の要素が想定されるものであるが、タカガは〈他の要素の想定が行われず、当該要素と他の要素から成る前提集合も想定されない〉ことから、とりたて機能を有するとするには問題があるということになる。

6. おわりに

以上、セイゼイ・タカダカ・タカガについて、それぞれの文の特徴を明らかにし、どのようなとりたて機能を有するののかについて考察を行った。考察の結果、セイゼイとタカダカは、「限度」と位置付けるか「たいしたものではない」と「低レベル」に位置付けるかの違いはあるにせよ、いずれも〈当該要素と対比される他の要素が想定され、それらがスケール上に並ぶような前提集合が想定される〉という点で、とりたて機能を有するということができるのに対し、タカガは〈単にタカガによって示される要素自体をマイナスに評価付けるもので、他の要素や前提集合が想定されない〉ことから、とりたて機能を有するものとするには問題があることが明らかになった。

とりたて副詞に分類される他の表現形式との比較や、同じくとりたて機能を有するとされるとりたて助詞との比較については今後の課題となる。

注

- *1 用例は、セイゼイ・タカダカ・タカガを片仮名表記にし、傍線などを適宜削除あるいは付加してある。なお、作者名が付されている用例は、『CD-ROM版新潮文庫の百冊』からの用例である。作品名は以下の通りである。赤川次郎『女社長に乾杯!』、北杜夫『検家の人びと』、小林秀雄『骨董』、椎名誠『新橋烏森口青春篇』、司馬遼太郎『国盗り物語』、谷崎潤一郎『痴人の愛』、新田次郎『孤高の人』、林芙美子『放浪記』、宮沢賢治『カイロ団長』。また、出典の明示がない例文は、すべて作例である。
- *2 ただし、明確に2つの用法に分類されているわけではなく、用例に混同もみられる。
- *3 工藤(1977)では、「ただ・おもに・せいぜい」などの副詞を「限定副詞」に分類し、「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」(pp. 971-972)と定義する。この「限定副詞」は工藤(1982)で「とりたて副詞」と改称されており、工藤(2000)でも「とりたて副詞」の名称を用いていることから、本稿でも「とりたて副詞」の名称を用いることにする。
- *4 工藤(1977)では、次のように「未来のできごとの数値を予想する」意味の場合、タカガが不自然になることを指摘し、タカガが「見積り」を表すもので

はなく、「すでに確定した数値に対して評価を加えるものであるため」と説明する。

- a 明日はセイゼイ百人ぐらいしか集まらないだろう。
- b 明日はタカダカ百人ぐらいしか集まらないだろう。
- c *明日はタカガ百人ぐらいしか集まらないだろう。

しかし、(31)の「…あまがえるの目方が何処あるかと云ったら、タカガ八処か九処でしょう。」の例のように数値を予想する例が、実例一すなわち許容される文として存在する。これは、(31)が単に数値を予測するのではなく、他と比較する文脈にあり、「〈たいしたものではない〉と位置付けられた数値」という「傾き」のある数値の予想であると解釈されるためだと思われる。先の例文cを次のようにマイナス評価の文脈にかえると、タカガの許容度が上がるように感じられる。

- d(?) 明日の集まりはよくないと思うよ。集まってもタカガ百人ぐらいだろう。

参考文献

- 安部朋世(2005)「副詞セイゼイの意味・用法と「とりたて」の在り方」『現象と理論のインタラクション』ひつじ書房(印刷中)
- 市川孝(1976)「副用語」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店, pp. 219-258
- 工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院, pp. 969-986
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集 3』, pp. 45-92
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』渡辺実編, 明治書院, pp. 176-198
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店, pp. 163-234
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 沼田善子(1986)「とりたて副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp. 105-225
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店, pp. 189-233
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- 【付記】本稿は、平成16年度科学研究費補助金・若手研究(B)「日本語における「とりたて」の体系化に関する記述的研究」による研究成果の一部である。